竜と俺との契約記

ちえん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
竜と俺との契約記

【Ｎコード】
Ｎ９８３３Ｕ

【作者名】
ちえん

【あらすじ】
カノコタウンに住む少年ブラックはある日、母親と喧嘩をしてしまい家を出てしまった。ふらふらと歩いているうちに夢の跡地にまで行き着いてしまった彼は逃げ惑うポケモン達の姿を目撃する。不思議に思ったブラックは夢の跡地の最奥部へと向かうがそこで目にしたのは幼い頃絵本で見た伝説のポケモン、レシラムだった。レシラムから告げられる『契約』、そして戦い。伝説のポケモンと少年達が織りなすバトルロワイアルが今、始まる。

プロローグ（前書き）

初めまして、ちえんです。
初投稿でまだまだ分からないこともあり未熟ですがよろしくお願いします。
上記のとおり未熟な初心者ですので何か間違いがあるかもしれません。
その場合は報告してくれればありがたいです。私自身も自分で気づけるように注意して小説を書いていきます。

あと、この話の注意事項として
・中二すぎるストーリー
・モンスターボールじゃなくて契約（）をする
・ポケモンは種族値６６０以上の伝説のポケモン（＋ａ）がメイン。荒いですが最後まで話は決まっています。こいつら以外の伝説を出す予定はないです。
・もはや原作レイプの域
・俺の知ってるポケモンじゃない……
・薔薇乙女に影響された小説です。もしかしたら「あれっ？」ってなるかもしれません
・処女作
・なんか描写少ないし話の流れ早くね？

等が挙げられます。（最後のは自分でも気を付けてるつもりですが……）
注意事項は随時追加していきたいと思うのでできれば見てくれたら不愉快な思いをしなくて済むと思います。
本編はプロローグみたいに短くないので安心してください。

１ページあたりの文字数は２０００前後でいってます。

あと、ゆっくり更新です。

プロローグ

この世界に何百とも溢れる生き物達、ポケットモンスター。
その頂点に君臨する一匹の創造神は毎日が退屈で仕方がなかった。
毎日、毎週、毎月、毎年人々やポケモン達は豊かに暮らし、子を育み皆幸せに生きている。
平和だ、この世界はあくびがでるほど平和すぎる。平和すぎてつまらない。
何か面白い事は起きないのだろうか。
戦争一つだけでは物足りない。飢餓や災害もつまらない。
何か一つだけでも良い。面白い事は起こらないだろうか。

創造神は考える。

そうだ、我は世界に君臨する創造神、面白い事は自分で創造すればいいのだ。

創造神は考えた。
面白い事、自分が楽しいと思える崇高な暇つぶし。

そうだ、我が選んだポケモンと、人間をそれぞれ……13だ。13匹と13人をそれぞれ組ませて戦わせてみよう……モンスターボールなどという生半可な繋がりだけでは駄目だ。
互いに『契約』させ、絶対に切れな繋がりを結ばせるのだ……

創造神は考える。
誰もいないこの空間で一人ニヤニヤしながら――

傷だらけの出会い１

「世のなかにはいろんなポケモンが居る……

でっかい奴、大きい奴、ちまっこいやつ、小さい奴……

まぁ、なんか色々居るらしいが、俺は全部大っ嫌いだ！！　ポケモンなんて糞くらえだ！！」

　周りが沈黙になる。

ブラックは持っていた原稿用紙を机に叩き付けてドカリと椅子に座った。

教室に居る生徒はブラックを除く全員が下を向き、ワナワナと怒りに震えて顔を真っ赤にした先生と目線を合わせないようにしていた。

「で……」

「ん？」

「で……？」

「何ですか？」

「これで終わりなのか？」

　声から伝わる先生の怒りも気に留めずブラックは一度あくびをして答えた。

「はい。」

「お前……今回のテーマ分かってるのか……！？」

　ブラックの挑発的な態度に先生は怒りを隠しきれないのかズカズカとブラックの席へと歩いて腕組みをした。

「はい、えーっとテーマは『ポケモン』でしたよね？」

「それだけか……？」

「ん？」

「それだけかと言っている……！！」

　先生は今にも爆発しそうな勢いだ。

しかし、ブラックはマイペースを保ち、ゆっくりと答えた。
「はい」

一章　傷だらけの出会い

「あー、もうなんだってんだよ。ポケモンの良い所1ついれろとか聞いてねーよ」
「それは君がきちんと先生の話を聞いてないからだろ」
「チェレンの言うとおりだよぅ」
　空は赤く染まり、もう少しで夜が訪れる。
トレーナーズスクールからの帰り道、ブラックは幼馴染のチェレンとベルと一緒にカノコタウンへと歩いていた。
「まあ聞いててもポケモンなんかに良い所なんかないから答えられないけどな」
「まったく君は本当にメンドーだな……」
「そんな事思ってるのブラックぐらいだよぅ」
「な、なんだよお前ら。喧嘩でも売ってんのか！？」
「まったく君は馬鹿だなブラック。」
「なんだと！」
「まぁまぁ2人とも落ち着いてよー」
　2人の言い合いにベルが制止をかけた。
睨みつけているブラックに対し、チェレンは冷めた目でブラックを

見つめた。
「それにぃ、ブラックがポケモン嫌いなのは昔遊んでた時にミネズミが……」
「なななななに言ってんだよベル！　違うっていっつも言ってんだろ！」
ベルの言葉に対しブラックは顔を真っ赤にして叫んだ。
「ああ、そうだったね。ブラックは小さい時にミネズミに噛まれて……」
「違うっていってんだろ！！　もうお前らなんかと帰らねェ！」
「あぁ！　ダメだよブラックゥ！　くさむらの中にはポケモンが……」
ベルの言葉も気に留めずブラックは顔を真っ赤にして走り出した。

「クソ！　クソ！　違う違う違う！　俺はポケモンが怖いんじゃねェ！　ワラワラ沸いてるあいつらが嫌いなだけなんだ！」
長い草が多い茂る草むらをブラックは駆けていた。
草の長さはブラックの膝ほどで足に絡みつくがそれを無視してカノコタウンへと走る。
「クソ！　先生もあいつらも俺を馬鹿にしやがっうわぁ！」
「ミギュ！？」
柔らかい何かにつまづいてブラックは大きく転倒した。
草と帽子が空に舞う。
「いてて……なんなんだよ……」
そう呟いたものの実際は草がクッションになり、たいした痛みはなかった。
しかし、顔面に触れる草はなんだかカサカサしていて不愉快だった。
「あー、くそ……」
ブラックは悪態をつきながら上半身を起こした。
「ミュギュ！！」
その拍子に動かした足元からなにやら鳴き声が聞こえた。

まさか――――
嫌な予感がした。
恐る恐る足元を見てみるとそこには――薄い茶色の体毛、特徴的な目、そして……真っ白な歯。
あの恨めしいミネズミの姿があった。

「う、うおぉおおおぉお！！」
情けない悲鳴をあげて思わずブラックは座ったまま後ずさりした。
「ミギュ……」
ブラックの視線はミネズミ一点だけを見つめている。
脳裏に浮かぶのは幼き頃自分の指を噛んだ野生のミネズミの姿だった。
「う、う、うぅうう……う、え？」
ブラックは最初気づかなかったが、ミネズミは弱り切っていた。
小さいその体で赤く腫れ上がった頭を抱えている。
赤い腫れはたんこぶだった。
おそらく、ブラックがつまづいた原因はこのミネズミだろう。
そしてこのたんこぶはブラックが間違えてつまずいたせいで出来てしまったのだろう。
「ミギュ……」
「……」
か細い声で鳴くミネズミの鳴き声を聞き、さすがのブラックにも罪悪感が沸いてきた。
「ミギュウ……」
「ご、ごめん……ミネズミ」
「ギュウ……」
ブラックの謝罪に答えるようにミネズミは力なく鳴いた。
「だ、大丈夫かミネズミ……」
「ギュウ……ミュ……」
正直、ブラックにはミネズミの鳴き声では何を言っているのか分

からない。
おそらくミネズミもブラックの言葉は分からないだろう。
ブラックは考えた。
このままこのミネズミをここで放置するのはさすがにできない、元の原因は自分にある。
しかし、ブラックはミネズミを抱えて家に帰ることができなかった。
「そうだよ……ベル、俺怖いんだよ……」
「ミュギ……？」
「ポケモンがこわ……」
「あー！　ブラック居たぁ！」
突然聞こえた声にブラックはビクリと体を震わせた。

傷だらけの出会い１（後書き）

どうでもいいかもしれませんがこれ書いてた時に別のページに間違って飛ん
で２回ほど消えました。
そのためしょっぱなから文章が劣化してます。
すみません……というかマジで挫折しかけたけど頑張って描いた。

傷だらけの出会い２

「べ、ベル……！　なんで……」
「なにびっくりしてるのぉブラック？　心配だからチェレンと探してたんだよぅ」
びっくりしているブラックを見ながらベルはにこやかに笑いながら答えた。
「それに、帽子落ちてたしねぇ」
ベルはそう言って自身のショルダーバックを開けて中からブラックの帽子を取り出した。
「そ、そうか……って、オイ！　俺のさっきの言葉聞いてたか？」
「さっきの言葉？なんか言ってたのぉ？」
ベルは指を唇に当てて考え始めた。
「ま、待て。聞こえなかったならそれで良い……それで、お前に頼みがあるんだが……」
「ふぇ？」
そういってブラックはミネズミを指差した。
「あ！　ミネズミだぁ！」
ベルはミネズミを見てミネズミの方へ駆け寄った。
「ちょ、ちょっと待て！そいつは怪我してんだ……」
「え？あ、本当だー！」
「ベル……そいつ抱えてカノコタウンに帰れるか？」
「うん！わかったぁ！」

「まったく、あんた何してんの！？　今日先生から電話かかってきたわよ？　それにこのミネズミちゃんに怪我させるなんて……！」
「……」
夜、ブラックは母親と共に居間に居た。

ミネズミに包帯を巻きながら自分を叱る母親にブラックは反論できなかった。
先生からの電話のくだりは腐るほど反論できたがミネズミの怪我では反論できない。
「ご、ごめん……」
「謝るならこのミネズミちゃんに謝りなさい！」
母親はそう言ってミネズミを抱えた。
だいぶ回復してきたようだが頭に巻いている包帯が痛々しい。
「……ごめんミネズミ」
「……あら、やけに素直じゃない。」
母親は不思議そうにブラックを見ながらミネズミをポケモン専用のカゴの中に入れた。
「……でも、怒ることはこれだけじゃないわよ。」
母親は腕を組みしょぼくれたブラックを見下ろす。
「なんだよ……」
「今日先生に反抗したんですって？あんたは何考えてるの！？」
「……うるさい。だってアイツいっつも俺ばっかり怒ってくるし……」
「先生にアイツなんて言うんじゃありません！　それでも今回はブラック、あんたが悪いんでしょう！」
「な、なんだよ！」
ついカッとなりブラックは声を荒げた。
「世の中には俺みたいにポケモン嫌いの奴も居るんだよ！　なんで無理にポケモン好きになんなきゃいけないんだよ！」
「誰も無理に好きになれなんて言ってないわ。ただ宿題はきちんと……」
「う、うるせぇ！　こんな家出てってやる！」
ブラックはそう叫んで乱暴に居間のドアを開けた。
「こ、こら！　待ちなさい！」
ブラックは母親の声を無視して玄関へ走り家を飛び出た。

サンヨウシティ上空

「いきなり眠りを妨げられたと思えば……創造神め……いくらあの方とは言え勝手すぎる……」

何百年ぶりの目覚めだろうか。

真っ白な羽に包まれた竜――レシラムは上空の遥か彼方を飛んでいた。

尻尾から紅い炎を出していくその姿は地上から見れば飛行機、あるいは未確認飛行物体に見えるだろう。

「……にしても、あの方の考える事は私には理解できない……」

私たちの力を人間と共有しろだと？そして最後に1匹になるまで殺しあえだと？

「いくらなんでも無茶苦茶だ……」

……殺せというのならあの脳筋馬鹿な黒い虫けらなら喜んで殺すが……

「それにしても、私が眠っている間にこの世界も変わったものだ。地上の光が美しいな……」

レシラムは地上を見て呟いた。

自分が眠っている間本当にこの世界はどう変わったのだろうか。

「あの時は失敗したが、今度こそは人間と共に……いや、私は戦う為に起こされたのだ。また幸せに暮らすなど……」

その時だった。

「よう、久しぶりだなぁレシラム！」

背後からいきなり自分の声を呼ぶ声がしたかと思うと――蒼い電流がレシラムを襲った。

電流はレシラムに直撃し、レシラムはバランスを崩した。

「グアァッ！　……こ、この声は……ッ」

レシラムは即座に羽をはばたかせ戦闘態勢に移り、電撃を放った

相手と向き合った。
紅い目に漆黒のような体からは所々蒼く光っている。
ゼクロム――伝説のポケモンであり、レシラムの対となる存在だ。
「やりぃゼクロム！　やっぱり背後から迫るのが一番ね！」
レシラムの知らない声が聞こえたと思えばゼクロムの背中からひょっこりと少女が身を乗り出した。
白い帽子はゼクロムの発する蒼い光を受けてぼんやりと輝いている。
「貴様……『契約』したのか……！？」
「あったり前だ！　お前より早く契約者を見つけてやったぜ！」
契約者が居るとなると……かなりまずい。
レシラムは創造神の言葉を思い出した。
「ゼクロム！　クロスサンダー！」
少女の言葉と共にゼクロムの周りには蒼い電流が走りゼクロムを包んで球体となった。
「そして今の俺はお前よりはるかに強い！」
ゼクロム纏った球体はレシラムに向かって――直撃した。
「ガッ……」
痛みと痺れが同時にレシラムを襲った。
レシラムはそのまま態勢を崩し気を失った――

「な、何してんのよゼクロム！　見失っちゃったじゃない！」
伝説のポケモンゼクロムとその肩に乗ってる契約者――ホワイトはサンヨウシティ上空をを彷徨っていた。
「い、いてっ。叩くなって！」
「もーこの役立たず！　ポンコツ！」
ぽかぽかとゼクロムの肩を叩きながらホワイトは叫んだ。

傷だらけの出会い３

「契約者が居ないうちはまともに力が出せないんだから狙うなら今なの！　契約者見つけたらどうすんのよ！？　弱らせてモンスターボールで捕まえて私だけ伝説のポケモン２匹持ってるよ！　って他の契約者に自慢したかったのに！」

「うっせーな。わがままな女だ」

ゼクロムはため息を吐きながらぼそりと呟いた。

「な、なによー！　あんたみたいなデカブツの鳴き声なんかすぐ聞こえるのよ？」

「いって！だから叩くなって！」

しばらくゼクロムに八つ当たりしたホワイトは疲れたのか息を切らしながらゼクロムを叩くのをやめた。

「チッ、やっとやめたか……」

「うるさい」

「……まぁ心配すんな。レシラムの奴は今弱ってる。あんまり動けねェはずだ。明日また探そう」

「クソ、母さんの馬鹿野郎……」

ブラックは２番道路を走っていた。

時々トレーナーから勝負を挑まれたりしたがポケモンを持っていないといえばみんなすぐに「ああ、ごめん」の一言で解放してくれる。しかし、今のブラックにはそれが気に食わなかった。

「みんなポケモン、ポケモン、ポケモン……」

ブラック自身は気づいていた。

自分はポケモンが嫌いなんじゃない。ポケモンが怖いのだ。

特に歯が尖っていたりするポケモン……幼き頃にチェレンとベルと一緒に一番道路で遊んでいた時、自分の指を噛んだミネズミを思い

出してしまう。
「クソォ……」
あの時、遊んでいなければこんな事にならなかったかもしれない。
どうしようもない気持ちがこみ上げてくる。
「俺だって……本当は……」
その時だった。
ドォンと遠くから何か大きな音が聞こえた。
「？　……なんなんだ？」
気づけば場所はサンヨウシティ。
ブラックは家に帰るつもりはなかった。……少なくとも今夜は。
「暇だし、この音の正体でも探ってみるか……」

夢の跡地

「グ……ァ……」
レシラムは羽に大きな傷を負っていた。
怪我をした場所は右羽、背中、足。ヒリヒリと傷口が痛み血がダラダラと流れている。
「ぐ……ゼクロムめ……今度会ったら焼き殺してやる……それにしても……」
レシラムは周りを見た。
さっきの音と振動にびっくりしたムンナ達がキョロキョロとこっちを見ている。
「おどろかせてすまない、ムンナよ。」
レシラムの声にびっくりしたのかムンナ達はビクリと震えそそくさと逃げてしまった。
「……」
まったく、私が眠っているうちにポケモンもよそよそしくなったものだ。

レシラムは心の中で悪態をつきながらふぅとため息をついた。
「それにしても……ここはどこだ？」
真っ暗でよく分からない。
おそらく明るくても何百年も石になって眠っていたレシラムには分からないだろう。
「あ、あの……」
どこからかか細い声が聞こえた。
「！？　誰だ？」
「あ、あの……怒らないでください……あなたの足元です……」
そう言われてレシラムは自身の足元を見た。
ピンクの煙を頭から放出している小さなポケモン。ムシャーナだ。
「お前は……ムシャーナ？」
「は、はい。そうです。すみません、ここのポケモンはとても臆病なので……みんなが逃げたのは許し……て……」
ムシャーナはおどおどしながら答えた。
声がか細すぎてうまく聞き取れない。
落ち着かなく手をモゴモゴと動かしている。
それを見たレシラムはふっと少し微笑みゆっくりと答えた。
「……そう怯えるな。私は怒っていない」
さっきよそよそしいとか言っていたのは内緒だ。
「あ、ありがとうございます。……そ、それで！」
緊張してうまく喋れないのかムシャーナはいきなり声のボリュームを大きくして叫んだ。
「レシラム……様ですよね？」
「……そうだが……」
「で、伝説のポケモン様がこんな辺鄙（へんぴ）に訪れてくれるなんて……わ、私嬉しくて嬉しくて……」
「……」
実際は訪れたというより落とされたというのが正しい。
「それで、どうしてこんな場所へ訪れたのですか？」

「話すと長くなるのだが……いや、そんな事より……」
レシラムはそう言ってムシャーナに右羽の傷口を見せた。
だいぶ痛みは治まってきたが羽毛は赤く染まり飛び散った血が固まってくっついている。
「少々怪我をしてしまってな……どこか休める場所を……ムシャーナ？」
ムシャーナはレシラムの傷口を凝視していた。
ムシャーナの頭部から出る煙だけが空へ漂い消えていく。当の本人は固まって全く動かない。
「おい、どうしたムシャーナ？」
「ち……」
「ち？」
今度はガタガタと震え始めた。
状況がよくつかめないレシラムは頭にハテナを浮かべてムシャーナを見ることしかできない。
「あ、あわわわわ……」
「……どうしたのだ」
「す、すみましぇ……すびませ……あぁぁ……」
「……とりあえず落ち着け」
「ごごごめんなしゃいいいい……私、血だけは苦手で……」
ムシャーナはそういうと両手で目を隠した。「あわわわわ……だからさっきから鉄のにおいが……」と小さく呟きながら丸くなっている。

傷だらけの出会い４

「そうだったのか……すまない」
レシラムはそう言いながら翼の傷を隠した。
「もう大丈夫だ。悪かったな……にしても、ずいぶんと臆病なムシャーナだ……」
最後の一言はぼそりと呟いたはずだがどうやらムシャーナに聞かれてしまったらしい。
ムシャーナは急にビクンと体を震わせた。
「も、もうしわけございません！！　臆病なのはムンナの頃からでして……」
「い、いや。気にしてない。それよりも場所を……」
長い間眠りについていたレシラムだったが、今夜はその眠りよりも長く感じそうだと一人心の中で呟いた。

「すいません！　通らせて！」
謎の衝撃音を聞いたブラックは夢の跡地入口に居た。
爆発音がした場所を特定するのに時間はかからなかった。あの音を聞いたのはブラックだけではない。
サンヨウシティの住人も聞いていて皆我先にと原因を突き止めるためにここに集まったのだろう。
当然こんなに人が居たらすぐにここであの音がしたという事が分かる。
夢の跡地入口には人だかりができて警察官がなんとか人々を制止している状態だった。
警察官の背後には立ち入り禁止を示す黄色いテープが張られている。
「みなさん落ち着いてください。ただ今野生のムンナが大量に出現して道を塞いでいます。興奮して皆様に危害を加えると危険ですの

で――」
1人の警察官がメガホンで叫ぶ。
「うっせー！　邪魔だ粕！」
誰かが叫んだ。
きっとスキンヘッドあたりのチンピラだろう。
ずいぶんとドスの利いた声だ。
「ただ今原因を突き止めるためにムンナ達を移動させていますので……」
警察官はそんな罵倒を無視してメガホンで叫び続ける。
そんな大音量のメガホンと罵倒があふれる人ごみの中をブラックはくぐり抜けた。
警察に気づかれないようにブラックは四つん這いになって『ＳＴＯＰ』と書かれた黄色いテープを潜り抜ける。
「よいしょっと……」
どうやらうまくいったようだ。
人だかりは皆警察やムンナに注目していて気付いてないらしい。警察もまた人を制止するので精一杯なのだろう。
ブラックはムンナを移動させている作業員に気づかれないようにムンナに気が付いた。
「……大丈夫だ。」
ムンナには歯がない。
ミネズミみたいにブラックの指を噛む事が出来ないはずだ。
ムンナ達はブラックに気づいているようだがどうやら攻撃する気はないらしい。
ブラックと目線が合ってもまじまじと見つめるだけで何もしない。
しかし、そんなムンナ達を見てブラックは不思議に思っていた。
「なんかこいつら……」
ムンナ達はみんなびくびく震えてるように見える。
ピンク色の瞳はどこか泣き出しそうな雰囲気を出してブラックを見つめている。

「こら！　何してるの！？」
「うわっ！」
　ブラックの背後から叱りつけるような高い声が聞こえた。
振り返るとそこには白衣を着た女性の研究員らしき人物が立っていた。
長い黒髪に頭にはピンク花の飾りをつけている。
眼鏡の奥から見える目は優しそうだがどこか疲れている。
「えっと……」
「ここは今立ち入り禁止です。危ないから早く出てください」
　まずい。
ブラックは心の中で呟いた。
何とかこの場を突破しなければきっとあの音の正体を掴めない。
なにより警察に連行されて家へ強制送還されるだろう。
　クソ、どうすれば……
ブラックは相手の弱みを握れる所を探した。
女。研究員。長い髪。眼鏡。……ない。
こうなったらやけくそだ。
「……パンツ」
「え？」
「パンツ見えてるよおねーさん！」
　ブラックは叫んだ。
もちろん彼女の下着は見えてない。白衣はきっちりボタンで止めていてスカートの色が何色かも分からない。
しかし、白衣を着た女性は顔を真っ赤にしてとっさに両手で足を抑えた。
「きゃっ、いや……」
「嘘だよ！」
　白衣の女性が小さく叫ぶと同時にブラックは立ち上がりとっさに走り出した。
こうなってしまったらもう隠れる必要もない。

さっきの白衣の女性の「待ちなさい！」という声を無視してブラックは茂みの中に入った。
茂みの中は整備されてないのか葉っぱが邪魔で前が見えないがブラックは無我夢中で走った。
もし捕まったなら母親が待つあの家だ。
とにかく夢の跡地へ行かなければならない。
ブラックはひたすらに駆けた。

何分かかっただろうか。
ブラックはいつの間にか夢の跡地に着いていた。
「はぁ……はぁ……」
息切れが激しい。
手を膝につけてブラックは立ち止った。
夢の跡地。
昔は盛んな工場地帯だったらしいが今では廃れて子供の遊び場となっている。
放置されたドラム缶や建物は月光に当たってぼんやりと光っている。
さっきの場所とは違い物音一つしないこの場所で人間はブラック１人だった。
いや、人間どころかポケモンさえもいないのかもしれない。
息を整えてブラックは周りを確認した。
ドラム缶がさびているのかどことなく鉄臭い。
おそらくポケモン達はほとんど逃げてしまったのだろう。
本当に静かだ。ざわりと風が吹き急に尿意がブラックを襲う。
「今なら人がいないし小便してもいいよな……」

傷だらけの出会い４（後書き）

ムシャーナ　♀　特性：？？
おくびょうな　せいかく。おっちょこちょい。
好きなもの：煙・花・夢
嫌いなもの：黒煙・血・虫・幽霊・怖い人
　レシラムが夢の跡地で出会ったポケモン。
　とても心優しい性格だが少し臆病すぎる気もする。
　このムシャーナだけではなく夢の跡地のポケモンは臆病なポケモンが多いみたいだ。
血が大の苦手らしい。

苦手なものの元ネタはエスパーの弱点タイプから。

紹介早すぎたかもしれない。
もっと掘り下げた所でするべきだったかな……まあいいか。
こんな風に他の人間、ポケモンも紹介していこうと思います。
他紹介予定はブラック、レシラム等……

傷だらけの出会い５

ブラックは再び周りを確認した。
「よし……」
ブラックは念の為に草むらに隠れた。
辺りは真っ暗で月光の光だけが葉っぱを、ドラム缶を、建物を照らしている。
もう一度だけブラックは周りを確認してズボンのチャック下ろす。
「……」
何故か気まずい。
周りは風が吹いているだけで誰も居ないはずなのに。
さっさと終わらせようとブラックがズボンを下ろした時だった。
――グルゥォオオオ
微かにだがどこからかポケモンの叫び声のようなものが聞こえた。
「？　……なんだ？」
ブラックはとっさに下げたズボンを上げて周りを確認した。
カサカサと葉っぱが擦れる音はするもののそれは風のせいだ。
野生のポケモンは居ない。
――グルゥゥウウウ……
再び、しかし今度ははっきりと聞こえた。
気のせいじゃない。この近くにはポケモンが居る。
「……」
ブラックの尿意はいつの間にか消えていた。
あの音の正体はこれにちがいない。
体の体温が一気に上昇したかのように顔が火照る。
心臓の動きは走ったかのようにドクドクと脈打ち体内の血を循環させる。
ブラックは耳を澄ませた。
――グゥゥ……

「声は……地下からか？」
ブラックはそう呟き茂みから出た。――目指すは、夢の跡地地下だ。

「グゥ……ッ」
「レシラム様！　頑張ってください！　私も応援しています！」
崩れた天井から延びる月光が夢の跡地の地下室を照らす。
レシラムはムンナ達から治療を受けていた。
その治療というものはすり潰したモモンの実と薬草を傷口に塗り付けるというものだが、それが傷口に染みてとてつもなく激しい痛みを伴う。
そんな痛みに頑張って耐えているレシラムに尻を向けてムシャーナは必至に応援していた。
「痛いですが効果は絶大です！　頑張って！　頑張って！」
「グゥゥゥ……おい、ムシャーナ……」
「はい？なんでしょうか」
「……いや、なんでもない」
どうしてお前は手伝わないのかと聞こうとしたレシラムだがなんだか図々しい気がしてやめた。
このムシャーナのことだろう、きっと傷口が見れなくて後ろを向いているはずだ。
「……？　分かりました。頑張ってレシラム様！　私たちはレシラム様を応援しています！」
正直この応援が恥ずかしいなんてレシラムには口が裂けても言えなかった。

「たたたたたたいへんですぅ！」
突然叫び声が聞こえたかと思うと一匹のムンナが階段から降りてきた。

目を見開き体中から汗を流している。
「頑張れレシ……どうしたんですか？」
ムシャーナは応援をやめて階段から降りてきたムンナの方を向いた。
応援がやんだ事にレシラムは安堵するものの次のムンナの一言により、全身が硬直した。
「に、人間が侵入してきましたぁ！」
――ついに来たか。
レシラムの頭に『契約者』という文字がよぎった。

「さっきのムンナどこに行きやがった……驚かせやがって……」
ブラックは夢の跡地の地下へと続く階段を下りていた。
「クソ……本当に死ぬかと思った……」
ブラックがムンナに対して怒っているのには理由があった。
先ほどブラックが夢の跡地の建物に入った時だった。
いきなりムンナが現れたと思えばテレキネシスでブラックを宙に浮かせて地下へ逃げたのだ。
そのまま放置されたブラックは3分間ほど身動きが取れないまま宙に浮き続けた。
その後、糸が切れたようにテレキネシスの効果が切れ、ブラックは尻からドシンとコンクリートの床に落ちた。
そんな理由でブラックは音の正体を探るために、ついでにムンナに制裁をかけるために地下への階段を降りていた。
コンクリートの硬い階段を踏みつけ、ブラックは拗ねた顔でずんずん最下部へと進む。
「ムンナめ……見つけたらバンジの実を無理やり食わせてやる……」
そう言うものの実際は口だけだった。
ブラックはバンジの実を持っていないし、そんな面倒な事をする気もない。

そもそも良心が痛む。
そんな事を考えているうちにブラックは夢の跡地最下部へと着いていた。
あたりは真っ暗で崩れた天井から零(こぼ)れる月明かりだけがこの空間を照らしている。
一見見るとガラクタが転がっている廃屋といった場所だ。
ドラム缶が数個床へ転がっていて、錆びれた椅子や机は散乱している。
しかし、この部屋には一つだけ誰もが違和感を感じる部分があった。
ブラックがさっきまで歩いていた階段から壁で隔たりが出来てみえないこの部屋の奥まで、幅5メートルほどの道が出来ていた。
道――というより、何かが通ってそこにあったガラクタを無理やり端へ追いやったような、床に何もガラクタがない部分があった。
そして、ところどころ落ちている、真っ白な羽。
ブラックはにやりと笑った。
おそらくこの羽は何かポケモン――おそらくあの音の正体の羽毛だろう。
そして、ブラックが笑った理由はもう一つある。
羽――つまり、毛ではない。
ブラックに毛と羽を持つ生き物の細かい差は分からない。
しかし、体にびっしりと体毛をはやし牙を持つポケモンは腐るほど見てきたが、羽を持ち、牙をはやしたポケモンは見たことない。

傷だらけの出会い６

つまり、ブラックが戦(おのの)く事もない。
誰よりも先にあの音の正体を掴める。優越感に浸れる。
ついでに、あのムンナも見つける事ができるかもしてない。
ブラックは両手で頬を一度パシンと叩き喝を入れた。
「俺が見つけてやる……ッ」
ブラックはそう叫ぶと目の前の道を走った。
目標はもうすぐそこだ。
散乱するガラクタには目もくれず、ブラックは邪魔だった隔たりの壁を押しのけるように手をついてそれを見た。
「あ……え……？」
一瞬何がどうしたのかブラック本人にもよく分からなかった。
あいかわらず壊れた天井から漏れている月光。
その月光を浴びてブラックの目の前に大きな真っ白い物体とピンク色の生物がそれに寄り添っている。
「グゥゥ……」
真っ白い物体――レシラムは威嚇するように鳴いた。

状況がつかめないというのはこういう事なんだろう。と、ブラックは思った。
「いや、待て待て待て……」
伝説のポケモンが居るなんて予想もしていなかった。
ブラックの目の前に居るのは伝説のポケモンレシラム。
それに寄り添うように２０匹ほど居るムンナ達。おそらくさっきのムンナも居るだろう。
そして、その中に居る大きなムンナ……ではない、ムシャーナ。
なにがどうなったらこういう状況になるのか分からない。
「むぅん」

突然ムンナ達が一斉に鳴く。
それと同時にムンナ達の体は淡いピンクの光に包まれた。
まずい。
ブラックの頭の中で先ほどムンナからくらったテレキネシスがフラッシュバックする。
おそらく今ムンナ達は戦闘態勢に移っている。
こんな興奮した状態で――ましてや２０匹ほど居るムンナから攻撃をくらえば生身の人間ならば重症では済まない。
最悪死ぬ場合もある。
ニュースでポケモンの攻撃をくらい重症を負った人間はたくさん見てきた。
自分もその仲間になるのだろうか。こんなに近くにいては逃げきれない。
駄目だ。なにもかも分からないままここで終わってしまう。
ムンナ達は頭からピンク色の光線――サイコウェーブを放出する。
ブラックはぎゅっと目を閉じた。
「ごめん母さ――」
「グゥゥウウオオオオオオ！」
耳を劈(つんざ)くような咆哮聞こえたかと思えば燃え上がるような熱気がブラックを襲った。
「あ、あづ……ッ」
ブラックは思わず顔を隠した。
本当に熱い。体が燃えているかのような感覚に襲われる。
目を閉じて顔を腕で隠しているブラックには何が起こっているのかは分からない。
しかし、どうやら死ぬ事は回避できたようだ。
しかし――
「あつっ！　ちょっと待てって熱い熱い熱い！」
尋常じゃない熱気にブラックは思わず叫んだ。
同時に目を見開くと目の前の空気は熱気で震えあがり思わず息を飲

んだ。
震える空気の向こう側はびっくりしたムンナとムシャーナが縮こまりびくびくと震えていた。
そして――おそらくこの熱気を産み出したポケモン、レシラムは羽を大きく広げじっとブラックを見つめていた。
『なるほど、熱さを少し感じたのが不安だが燃えてはないようだな……それに、契約しなくても近くに居るだけでこれほどの力が……やはりこの人間か……』
どこからか声が響いた。
女なのか、男なのか分からない中性的な声だった。
「だ、誰だ……？」
ブラックは周囲を確認して声の主を探した。
しかし、周りには怯えているムシャーナ達とさっきの熱気で焦げたガラクタしかない。
『私はお前の目の前に居る』
「は……？」
ブラックの目の前にはレシラムしか居ない。
ポケモンが喋るわけがない。仮に喋るとしてもこのレシラムは口を開いて話していないし候補としては論外だ。
「お、お前もしかしてこのレシラムのトレーナー……？隠れてるんなら出てこい！」
ブラックは崩れた天井に向かって叫んだ。
月明かりがほのかに刺している。
きっと地上から話しているに違いない。それがブラックの読みだった。
『お前は何を勘違いしている……』
「え……」
『私は私……レシラムだ。お前の目の前に居ると言っただろう』
声の主――レシラムはそう言うと開いた羽を閉じてムシャーナ達の方を向く。

『すまないムシャーナ、ムンナよ。少なくともこの人間は善の心を持っているようだ……お前たちもな』
「むぅぅん……」
『ああ、傷はなんとかなりそうだ。……少し染みるが』
話がよく分からない。
何故レシラムは人間の言葉を話せるのか。しかも口を開かずに。
何故周りのガラクタは焦げているのに自分は火傷一つしてないのか。
何故こんな所にレシラムが居るのか。
『ん？　どうした人間。不思議そうな顔をしているな』
ぽかんと口を開けたブラックを見てレシラムは言った。
「いや……なんでお前人間の言葉話せるんだよ……」
ブラックは第一の質問を口にした。
レシラムはそんなことも分からないのかというような顔をしてブラックを見つめた。
『私が発しているこれは人間の言葉などではない。テレパシーというものだ』
「……テレパシーって話さずに相手に言葉を伝える方法だろ？　なんで人間の言葉に……」
『……お前に分かりやすく言うとテレパシーを向ける相手によって自動的に言語変換される……ああ、そういうものだ』

傷だらけの出会い7

レシラム自身も説明が難しいのか少し自信なさげに答えた。
「伝説のポケモンのくせに……」
レシラムに聞かれないようにぼそりと呟いたつもりのブラックだったがどうやら聞こえてしまったらしい。
レシラムは少し眉間に皺を寄せたような顔をして「フンッ」と一度うめいた。
『私はエスパータイプではない……もっともテレパシーというのはエスパータイプの中でも崇高な種族でさえ習得するのは難しいと聞く。いわば選ばれた個体だけが使える意思疎通手段だ。そんなものが使えるだけでも公衆は驚くのだがな……』
「むぅん」
「そうだそうだ」とでも言うようにムンナ達は鳴きだした。
「わ、分かったよ……」
ブラックは少々納得しないものの場の空気を読んでそう発言した。
納得しないというよりまたムンナから攻撃をくらったら一たまりもない。
ブラックは横目でムンナ達を見ながらそう心の中で呟いた。
「むぅん」
一匹のムンナがブラックの視線に気が付いたのか小さくないた。
なんだか睨みつけているようでブラックの心拍数が少し上がるがそれと同時にブラックは忘れていた事を思い出した。
「あ……ああ！　忘れてた！」
ブラックはそう叫ぶとムンナの塊へ向かって歩き一匹のムンナを掴んだ。
ムンナ達はビクリと同時に震え、ムシャーナはムンナ達の塊の中に入って身を隠そうと必死にモゴモゴ動いている。
ブラックに掴まれているムンナは先ほどの威勢はどうしたのか急に

縮こまったように体を丸めて頼りなさそうに目をブラックから逸らした。
『……何をしている人間』
「……むぅん」
ブラックは目線をムンナからレシラムに移してここに居る者全員に話すかのように叫んだ。
「こいつだよ！　俺が何もしてないのにいきなり攻撃かましやがって……！」
掴まれているムンナは「別に自分は悪くない」と言い訳でもするように小さく鳴いた。
「なんだこいつ……喧嘩売ってんのか？」
『落ち着け人間。このムンナにとっては正当防衛だ。男ならそれぐらい許せるほどでかい器を持て』
「おい、このムンナさっき喧嘩売ってるみたいな感じで鳴いたんだけど」
『みたいな感じとはなんだ。なにはともあれそのムンナはお前に掴まれてそうとう驚いているはずだ。それだけで十分だろう。もうムンナは離してやれ。それとも私の炎で焼き殺されたいか？』
「ぐ……」
あの圧倒的な熱さを体ごと味合わされたブラックは反論する気さえおきなかった。
なんだか無理やりまとめられた気がするが、ブラックはなすすべもなく掴んでいるムンナを放した。
ムンナは一度振り返りブラックを見て「ざまぁみろ」とでも言うような顔をして逃げるようにムンナ達の所へ戻った。
「あの野郎……」
ブラックは溢れかえる苛立ちを抑えながらも拳を握りしめていつか殴ってやると心に誓った。
『……ところでだ。人間』
「あ？　なんだよ」

今思えばレシラムが勝手に仲人をしたのが悪いのだ。
イライラを隠せないブラックはレシラムへの返事を即答で答えた。
レシラムはそんなブラックを見て一瞬顔を顰めたが、どうでもいいというように話を続けた。
『私と共に戦ってほしいのだが……いや、お前は戦う運命だ。これは創造神がお決めになられた天命なのだ。私もお前も抗えない』
「……は？」
ブラックの苛立っていた感情は一気に吹き飛び頭の中で「戦い」「運命」「創造神」の三単語がぐるぐると回る。
なにを言いたいんだ、この白竜は。とでも言うようにブラックは眉間の皺をさらに深くしてレシラムを凝視した。
「いや、なんだそれ……いきなり……」
『いきなりなのは正直私もすまないと思っている。しかし、時間が無いのだ……』
なにかの冗談かと疑っていたブラックだったがレシラムの真剣な眼差しを見て冗談ではない事を悟った。
「わけわかんねーけど……詳しく話せよ……」
なんだか自分の知らない所で何かが動いている。
どうやらそれに自分も関わっているらしい。と、なると話を聞かないわけにもいかない。
例えむかつく奴の話であってもそれは例外ではない。
レシラムは意外そうな顔をしたあと一瞬だけ微笑を見せて話を続けた。
『私も詳しい話は分からない――だから今、私の知っているものをすべてお前に話す。質問があるなら話が終わったら遠慮なく言え。後で聞かれるのは面倒だからな』
「……」
レシラムは羽をたたんで腰を下ろしていた。人間でいう座った状態だろう。
そのレシラムの前にブラックは胡坐をかいて座っている。

ムンナ達はいつの間に震えが止まったのか皆じっとしていている。
遠目で見たら一つのピンク色の物体に見えるだろう。
ムシャーナは相変わらず頭から煙を放出してびくびくと震えていた。
どうやらムンナ達の中に入るのは失敗したらしい。
零れた月明かりだけが辺りを照らし、地下室はとても静かだ。
『事の始まりは私にもよく分からない……が、おそらく創造神の気まぐれだろう。この世界に居る１３匹の「神に次いで強い」とされるポケモンが選ばれた。私はその中の１匹だ』

傷だらけの出会い８

ブラックは創造神というワードが気になっていた。
その創造神というものはポケモンなのか、人間なのか、それとも他の生き物なのか――とにかく、トレーナーズスクールの授業をまともに受けていないブラックは「どういうポケモンがどこに居てどこに生息している」というような細かい事など分からない。
その創造神がポケモンであるならば今までの授業の中で習ったか、これから習うかのどちらかだ。人間がその創造神というのをポケモンとみなしていたならばの話だが。
『他の１２匹の場合は分からないが、私の場合は創造神が夢に現れたのだ。これから始まる戦いと――いや、戦いなどではない。殺しあいと人間との契約。そのルールを』
「殺しあい」という言葉にブラックはゾクリと背筋が凍った。
「こ、殺し合い……！？」
『そうだ。創造神は戦いと言っていたがこれはあきらかな殺し合いだ。』
レシラムは落ち着いた声音で返答をした。
しかし、その蒼い瞳にはどこか悲壮感を含めた光を宿している。
ブラックはごくりと唾液を飲み干した。
『創造神は最後の１匹になるまで戦えと言ったのだ。一度も殺しあえとは言っていないが、生き残った者とその契約者だけが勝者だと言っていた……』
ひゅうと風が吹いた。
淡々と話すレシラムだったがやはりそのまなざしは悲しく、そして怒りを持っていた。
「で、でも他のポケモンも殺しあうの嫌だろ……そんな勝手に決められて……」
『もちろん戦いを好む愚か者でなければそんなもの誰も参加しない。

創造神はこの戦いにいくつかのルールを決めた。１つ、生き残った１匹とその契約者の願いを叶えてくれるらしい。まったく……バカバカしい己の願望は自分で掴み取るものだ。２つ……』
「あ……！　おい、ちょっと待て！」
「……なんだ。質問は話が終わってからにしてほしいのだがな」
「さっきから出てくる契約とか契約者とか何なんだよ」
　創造神や殺し合いという言葉に思考をとられ全然頭の中に入らなかったブラックだったがもう１つ、いや、２つの不可解な言葉がある事に気が付いた。
「契約」と「契約者」。
推測としてはこの殺し合いの中で重要なものなのではないか、とブラックは考えた。
そしてそのブラックの推測は的中していた。
『ああ、言い忘れていた。この殺し合いに参加する前にやらねばならない事がある。それが「契約」だ』
「……やっぱりな」
『フン、だいたい憶測はついてるみたいだな。私達１３匹は例外なく自分のパートナーとなる人間を選ばなくてはならない。その人間が「契約者」だ。私の場合……それがお前、らしい』
　レシラムは少し怪訝そうな顔をして言った。
「おい、なんだその顔は」
　怪訝そうな顔をしていたレシラムだったが、しかめっ面をするブラックを見て少し微笑んだ。
『すまない。もう少し立派な青年が私のパートナーだと想像していたからな。お前は容姿も精神も少し子供すぎたかもしれない』
「子供で悪かったな」
　眉間の皺を寄せたブラックは顔の向きをレシラムから横に移して頬を膨らませた。
『いや……お前はお前で善の心を持っている。さっきお前をムンナ達のサイコウェーブから助けた炎、あれは善の心を持つ者だけを焼

かない特別な炎だ。少々熱さを感じたようだが完璧な生き物などいない』
「な、う、うるせぇ！　さっさと話すすめろ！」
褒められると少し照れくさくなってしまうのが人間の性(さが)だ。
ブラックは内心少し照れながらも伝説のポケモンに認められたという事実に嬉しさを感じていた。
レシラムはブラックの感情を悟ったのか『ああ、そうだったな』と少しからかうように言い話を続けた。
『おそらくあの時から……創造神が私の目の前に現れた時からだ。体は怠く、1回1回の攻撃が重く感じる……創造神は私達の力を押さえつけた。自身の膨大な力を使ってな。気づいた時には体が重い。創造神はこの世界のどこかにいる自分の波長と合う者を探して契約しろと言った。その人間こそがこれから戦うお前たちの力の源になるだろうとな。創造神はその人間を契約者と呼んでいた』
先ほどの会話の微笑みはどこへ消えたのかレシラムは再び真剣な目つきになっていた。
「それが……お前の契約者が俺？」
『おそらく――いや、ほぼそうだ。お前が現れると同時に体が軽くなり力がみなぎった。さきほどの炎が出せたのもそのせいだ。近づくだけでこれほどまでに力が出る……私の契約者はお前だ』
地下室に沈黙が流れた。
まったく今日はとんでもない日だとブラックは脳内で呟いた。
先生に怒られて、ミネズミに怪我を負わせ、母親と喧嘩をして、家出をし、白衣の女性にまたまた怒られ、ムンナ達から攻撃をくらいかけ、伝説のポケモンと遭遇し――自分がその契約者というものになる。
こんなに大変な一日、人生に一度あるかないかだ。
いや、そんな大変な一日はどうやらこの一日で済みそうにないらしい。
『……私達の都合でお前が命の危機に晒される。そんな事に関わり

たくないのは分かる……しかし、一刻を争う事態なのだ。……それにお前は私と契約してもしなくても命を落とす可能性がある』

傷だらけの出会い８（後書き）

１０日ぶりの更新ですいません。
やっぱり始めっから長くなりそうだ……私的にはまだまだ短いと思うんですが某所で長すぎとの指摘ががが

【追記】
間違って消しちゃって最後のレシラムのセリフをもう一度作り直しました。
最初の文章読んじゃった人すみません。
最初に書いた文章全く覚えてないですが内容はたいして変わってないとは思うので読む分には支障はないです。

傷だらけの出会い９

「……どういう事だよ」
　ブラックは眉間に皺を寄せた。
ブラックと契約する為に考えた出まかせの口実ではないだろう。だいたいレシラムがそんな事を考えているとは思えない。
『さっき言ったように今の私は弱い。力を押さえつけられているからな……しかし、お前と一緒に居るとどうだ、契約しなくても力がみなぎる……』
　ブラックは意味が分からないとでもいいたいのか頭の上にはてなを浮かべてレシラムを見つめた。
『つまりだ……お前が一国の王だとする』
「いきなり壮大な話になったな」
『静かに聞け。お前の国の周辺は手ごわい敵国ばかりだ。その中である１つの国が弱っていたとする。……お前なら他の国とこの弱っている国、どこを攻める？』
「そんなの弱ってる国に……あ」
　ブラックは目を大きく開けて呟いた。
つまり、レシラムはその中の「弱っている国」なのだ。
敵は少ない方が良い。それならまず先に弱っている国を潰すべきなのだ。
きっと周りの国――他の１２匹のポケモン達はレシラムを狙うだろう。
『そしてその弱っている国がもし力をつけようとしたらお前はどうする？』
「もちろん邪魔するな」
　ブラックはレシラムを見てコクンと頷いた。
弱っている国――レシラム。そのレシラムの力の根源となるもの、
　つまりブラックだ。

ブラックはレシラムの力の根源だ。
ブラックが居ればレシラムは本調子を取り戻し他の１２匹とも同等かそれ以上に戦えるだろう。
しかし、逆に言えばブラックが居ないとレシラムは同等以下の力しか発揮できない。
狙うならブラックと契約していない今。契約する前にレシラムを倒した方が手っ取り早い。
しかし、万が一レシラムがブラックと契約してしまったら他の１２匹にとっては面倒な事になるだろう。
それならブラックが居なければいい。
もしブラックがレシラムの契約者とばれてしまえば真っ先にブラックは狙われるだろう。
ブラックもただの人間なのだ。伝説のポケモン相手に戦えるほど優れた能力を持っているわけがない。
第一先ほどのムンナのテレキネシスでさえ解けなかった。
強大な力を持つ伝説のポケモンの前では息をする間もなく瞬殺だろう。
『もう理解はできているだろうが……お前は私の力の源だ。お前を殺せば私は力を出せなくなり、他の１２匹のうち、誰かに殺されてしまうだろう』
「どっちみち危険って事か……」
ブラックはぽつりと呟いた。
独り言なのか、レシラムに言ったのか分からない。
ただ下を向いて呟いた。月明かりだけが頼りの地下室でブラックがどのような表情をしているのかはレシラムには分からない。
レシラムは申し訳なさそうに言う。
『すまない……本当にすまない。私もできればこのようなくだらない殺し合いには参加したくないのだ……お前の命は私が死守しよう』
「……お前なんか勘違いしてないか？」
ブラックはそう言うと顔をあげて真剣な眼差しでレシラムを見た。

ブラック自身も不思議でならなかった。
今までポケモンが嫌い――否、怖かったブラックだった。しかし、今では何故かそのポケモンと対話をして、これから共に死闘の中を生きなければならないことになっている。
今日一日色んな事があり感覚が麻痺してしまったのかもしれない。ブラック自身も分からない。ただの勢いなのかもしれない。
しかし、ブラックは自分の相棒となる白い竜に今の気持ちを告げた。
「確かに、俺は死にたくない。念の為に言うがこれは俺がビビりとかじゃなくて生き物としての本能からきている。勘違いするな。それに、どっちみち俺は命の危機に晒される。それなら守ってくれるお前が居る道を選ぶ。」
『人間……』
「……あと一つ言っとく。俺は死にそうになってる奴を見過ごすほど屑じゃない」
『……その死にそうになっている奴というのは私の事か？』
「他に誰が居るんだよ」
ブラックの言葉にレシラムは一瞬きょとんとした顔をした。
しかし、すぐに微笑を見せてちらりとムンナ達の方を見た。
ブラックもレシラムの視線に合わせてピンクの塊の方を見て「ああ、そういえばこいつら居たな」と呟いた。
ムンナ達はまだピクリとも動かずはたから見れば一つの生き物に見えてしまう。
確かにその姿は見かたを変えれば死体を山積みにしているようにも思えなくない。
この表現だと死にそうというより、死んでいる事になってしまうが。
その中で一匹、少し大きい体躯のムシャーナだけは眠いのかコクリコクリとその体を動かしていた。
「……で、まだ話の続きはあるんだろ」
ブラックの言葉にレシラムはハッとし、正面を向きなおした。
ブラックは先ほどの真剣な眼差しでレシラムを見ていた。

『ああ、そうだったな。……契約の事は話したな。二つ目、この殺し合いには期限がある』
「期限？」
『そうだ。この殺し合いには９０日の時間制限がある』
「約三か月って所か」
『そうなるな。ちなみに今日で３日目、いや……もう４日目か。私達は少々遅れている』
「……は？何でだよ」
ブラックは眉間に皺を寄せて言った。
レシラムは３日の間何をしていたのだろうという疑問がブラックの脳内に浮かび上がった。

傷だらけの出会い９（後書き）

朦朧とした意識の中書いたからグダグダッス。
たぶんちょいちょい修正します。

傷だらけの出会い１０

『さっき言ったように私は長い間眠りについていた。創造神が眠っていた私に戦いを告げた事は教えたな？　その時創造神は戦いが始まるのは今日、月が天の上に上がる時と言った。つまり、午前零時だ』

「いや、そんな事は聞いてない。お前、俺と出会うまで何してたんだよ」

　力が発揮できない三日間。レシラムは他１２匹に狙われる生活を送り続けていたのだろうか。

そういえばなんとなく鉄臭い気がする。しかし、それは血匂(あの)いではなくドラム缶のせいかもしれない。

それでも、確信が持てないブラックは嫌な予感がした。

『ああ……目覚めるのに少々時間がかかってな……目覚めてからも体が慣れずに一日ほどじっとしていた。その後しばらく飛び回ってここまで来たというわけだ』

「なんだよ……てっきり他の１２匹に攻撃されたのかと……」

『ああ、今日……いや、昨日か。ゼクロムに攻撃された』

「なんだゼクロ……え」

　予想外の己の考えの的中にブラックは停止する。

レシラムは何事もなかったかのようにブラックを見て『どうした』と呟いた。

「どうしたじゃねーよ！　お前攻撃されてるのに何でこんなに元気なんだよ！」

　思わず突っ込みを入れたブラックはすぐさまレシラムの羽毛に包まれた体を見る。

しかし、どこをどう見ても血は付着してなく真っ白なままだ。

『どうした？』

　ブラックの視線に気づいたレシラムはブラックに声をかけた。

「……どこも怪我してないじゃねーか」
レシラムの真っ白な羽毛は鮮血どころか汚れ一つ付着してない。とても襲撃されたとは思えないブラックは「うーん」と唸った。
『ああ、傷か。傷ならあのムンナ達が治癒してくれた』
「……あいつらそんな事出来んのかよ」
ブラックの脳裏にあのむかつくムンナの表情が写る。とても生き物の傷を治せるほど神秘的な能力を持っているとは思えない。
「あいつらが……うーん、納得できない……」
『何を言っているのだお前は』
「なんでもない。さっさと続き話せ」
『残念だがこれで終わりだ。創造神が私に伝えたのはこれだけ……だが』
レシラムはそう言うと少し間を置いて呟いた。
『分からない……創造神は驚くほどに気まぐれだ。もしかしたらルール追加やまだ誰にも、もしくは一部のポケモンにしか伝えてない情報があるかもしれない』
「一部のポケモン……？」
『ああ、創造神がこの世界を作った際に生み出されたポケモンが三体居るのだ。一匹は創造神の怒りを買いどこかへ飛ばされたようだが残り二匹は今もこの世界のどこかに居る、はずだ』
「何だその三体のポケモンって……」
そんなポケモン聞いた事がない。
というより、創造神とされるポケモンでさえ知らないブラックがそんなポケモンを知るはずがない。
『……お前に分かるように例えるなら二体が時間と空間。いや、それ自体がそのポケモンだ。飛ばされたポケモンは私にもよく分からない。会った事すらないからな』
「その時間と空間って……そいつらもこの殺し合いに……か？」
『おそらく、な。この三体は創造神が直接生み出した存在だ。もし、

創造神が贔屓をするならこの三体が真っ先に選択候補に選ばれるだろう。飛ばされた者は分からないが』
「ふーん……」
　時間と空間にまつわるポケモンなどブラックには到底想像がつかない。一瞬その姿を想像してみるがすぐにやめた。
考えるだけ無駄だろう。
時間と空間と追い出されたもう一匹。おそらくこの先の戦いで見る事になるのだ。
『それで、一通りルールを話したが人間』
「ん？　何だ？　まだ何かあるのか？」
『ああ、お前の名前を教えて欲しい。これから私の契約者、パートナーとなるお前の名を』
「名前……？」
　そういえばまだ名前を言っていなかった事にブラックは気がついた。
そうだ。今から目の前の竜は自分のパートナーとなるのだ。名前を教えなければいけない。
「……俺の名前はブラックだ。レシラム」
『ブラック。なるほど、黒か。白い体を持つ私とは対なる色。こういうのも面白いだろう』
　レシラムは満足げにそう言うとその真っ白な翼を広げて立ち上がった。
いきなりの事にブラックはびくりと一瞬だけ体を揺らせ大勢を崩した。ムンナ達はもごもごと忙しく動き出す。
地下室は意外に広くて大きい。が、レシラムが立って翼を広げると急に狭く感じられる。
実際レシラムはギリギリ天井に付くか付かないかの大きさで翼は天井に密着していた。
さすが伝説のポケモンと言った所かその威圧感は凄まじく先ほどまで普通に話していた生き物とは思えない。

伝説の白竜。
まさにその名がふさわしい。
『ブラック、今更怖気付いてはないだろうな……』
そういうレシラムの言葉はどこか勇ましく、瞳は闘志を秘めていた。
「なわけねーだろ……」
ブラックはニヤリと笑い立ち上がる。
「その、今から契約するのか？」
『ああ。契約自体は簡単だ。今から私が言う言葉にお前が「契約する」と言えば良い。』
「なるほどな」
『……もう一度聞くが、ブラック。本当に契約してもいいのか？
契約した後に待ち受けるモノはお前の想像以上に残酷かもしれない』

傷だらけの出会い１１

「ああ、大丈夫だ」
レシラムを見つめるブラックの瞳は強い意思が宿っていた。
ブラック自身も自分が信じられない。正直、自分がこんなに度胸がある人間だと思えない。
ポケモンが怖くて今まで逃げてきたが、今なら大丈夫。自分にそう言い聞かせた。
『ふん。上等だ』
レシラムがそう言うと同時にレシラムの体の一部が紅く輝き出す。熱い。レシラムの熱がブラックに伝わった。
ブラックはその姿に懐かしさを覚えた。
本物のレシラムを見たのは初めてだ。しかし、ブラック自身はレシラムを知っていた。
最初にレシラムを知ったのは幼い頃。その時見た絵本だった。
その絵本に描かれていたのはレシラムとゼクロム。内容は幼児向けに書かれた簡単なものだ。
その絵本の中に描かれていたレシラムと目の前に居る紅く輝くレシラム。
似ている。いや、おそらく同じだろう。
その絵本の中ではそのレシラムの姿を「オーバードライブ」と呼んでいた。
何故幼い頃の記憶が鮮明に蘇ったのかは分からないが、確かにブラックはその姿のレシラムを知っていた。
『ブラック――この私と、これから共に戦う事を契約するか？』
おそらく今の言葉が契約の言葉だろう。
ブラックの中に躊躇（ためら）いなどなかった。
拳を握りしめて、ブラックは答える。
「契約する……」

ブラックがそう呟いたのと同時に、目の前が一瞬にして紅に染まった。
外じゃない。体の内側が熱い。これはたぶん、レシラムの炎。
紅と温度だけが存在する世界。
かろうじてそう認識できるだけで、ブラックはそのまま気を失った――

創造神はイライラしていた。
たった今、やっと契約できたらしいポケモンが居るらしいがそんな事は関係ない。
まだ契約していない、する気もない者がいる。
さすがの創造神も他の者の思想を完璧に読み取る事はできない。
しかし、これは予想外だった。
アレはもっと好戦的な奴だと考えていた。
だから、まっさきに喜んでこの戦いに参加すると予想していた。
しかし現実はその考えとは全くの反対だった。
絶対にこの戦いで一番活躍してくれると考えていた。
一番血を浴びて、一番暴れて、一番楽しませてくれる――
「……」
とにかく今は様子見だ。
どのみち命を狙われる運命、契約しない者を待つのは死のみだ。
死んだら死んだで良い。その程度の奴だった、で良いのだ。
「フ、フフ……」
創造神は微笑んだ。
そうだ、この戦いの結果は創造神である自分自身にも分からない。
とにかく今は楽しめればいいのだ――

傷だらけの出会い１１（後書き）

傷だらけの出会い完結

はっぱ

おそらく今が人生の中で一番ついている。
深夜になり静かになったトキワシティで少女は一人歩いていた。
持っていた缶ジュースを後方へと投げる。カーンとアルミ缶がコンクリートの地面にぶつかる音が響く。
そもそも少女は缶ジュースをゴミ箱の中に入れるつもりはなかった。
よって投げた缶ジュースは何処へ行くあてもなく地面にぶつかる。
そんな事はどうでも良い。
今は人生の中で一番ついている時なのだ。
神様が自分を選んでくれたのだ。自分を買ってくれたのだ。
しかし少女は神様を信仰する事はない。相手は神でも悪魔でもなんでもいい。たまたま選んでくれたのが神様だっただけだ。
だから一応神様には感謝している。しかし、それは一瞬だけだ。
おそらく、近いうちには感謝も糞もなくなる。
何故なら少女はその神の座を狙っているからだ。
「フフ……神様は馬鹿ね」
誰にいうわけでもない。だたの独り言として少女はつぶやいた。
全くもって神は馬鹿だ。何故、懸賞を「勝者の願いを叶える」なんてものにしたのだろうか。
「そんなものにしたら絶対、私みたいな願いをする人間が出てくるに決まってるじゃない……」
ヒュウと風が少女のスカートを揺らした。長い茶髪は風に揺れている。
「私が……この私が……」
少女はそう言って両手を天に掲げた。
「神になるのよ……ついにこの時が来たの……」
少女のその姿はまるで何かを崇拝しているかのような雰囲気を出していた。

しかし、少女の中には神などというものは存在しない。何かを信じているわけでもない。
信じているのは己の力のみ。
「……来なさい。レックウザ」
少女が口にしたのは己の契約したポケモンの名前。
その一言を口にした瞬間、風が再び吹いた。
星と月が輝く夜空の闇を何かが過ぎる。
その何かは大きくうねりながら地上に――いや、少女に向かって勢い良く空から降りてくる。
風は更に強くなりざわざわと木と木が掠れた。降りてくる何かに少女は怯える気配も見せず、それどころか少女の口は弧を描いていた。
空から降りた何かは少女との間に5メートルほどの空間を残して勢いを止めた。
緑色の大きな体は蜷局を巻いて少女を見つめた。特徴的な黄色のラインは暗闇の中で月光に照らされ黄色く輝いている。
「それで……どうだったの？　新しい契約者は見つかった？」
少女は空から降りてきた緑色のポケモン――レックウザを見て呟いた。
「ああ、一瞬だが大気の空気が揺れた。原因は熱気だろう」
「熱気……」
少女はそう言うと視線をレックウザから離して暗闇の空を見た。
「熱気……きっと炎タイプね。ポケモンの特定は出来た？」
少女がそう言うとレックウザは少しためらうような素振りを見せた。
視線を逸らす、まるで言いたくないかのように。
「……レックウザ」
さっきまでの自信に満ちた態度とは逆に、少女は少し苛立ちを含んだ声音で言った。
「……熱気は感じられたが、ポケモンまでは分からん。たぶん炎タイプだろう……」

「たぶん……？　炎タイプ？　……そんな事はもう分かってるのよ！　私が欲しいのはそのポケモンが何かという情報！　そんな事も分からないの！？」
少女はヒステリックに叫んだ。
レックウザはその叫びを聞く事しかできず黙り込んだ。
「なによ！　何か言いたいなら言いなさいよ」
「たぶん、レシラムだ。選ばれたポケモンの中で炎タイプを持つのはたぶん、ホウオウとレシラムだけだだ。お前と会う前も一度炎の揺れを感じた。かなり近くでな。だが今回の炎は遠くの方から感じた。おそらくイッシュ地方だ。あそこの炎といえばレシラムしかいない」
少女とは逆にレックウザは落ち着いた口調で話した。
レックウザの言葉を聞いた少女は今度は少し不機嫌な顔になりながらため息をついた。
「最初からその事を言いなさい、レックウザ」
「悪かったな」
レックウザは機械的に答えた。
レックウザにとって少女のこの態度は今回が初めてではなかった。初めて出会った時から少女は自信家で、少しでも気が触れるとすぐにヒステリックを起こしレックウザを困らせた。
しかし、レックウザはそれに反論する事もなく淡々と少女に言われた事をやり続けた。
相手は少女でも自分の契約者でありパートナーであり主なのだ。例え自分が最高種であろうともその事実は変わらない。
「あなたは私の手駒なんだから私に全てを話せば良いの……」
「フン……」
伝説のポケモンと対峙しても変わらない態度。少し苛立ちはあるが嫌いではないとレックウザは思った。
それに、レックウザはこの少女が何故こんな態度なのか、この殺し合いに執着しているかの理由を知っていた。

「イッシュは遠すぎるわね……まずはジョウトから潰すべきかもしれないわ……」
「おいおい、ちょっと待て。ジョウトからは冷気が漂ってるんだが……」
「それが何？　……寒さぐらい克服しなさい」
「無茶苦茶だな……」
レックウザの言葉を無視して少女は右手を上げてくいくいと手を振った。
「来い」という合図だ。
レックウザは少女に近寄った。
「レックウザ、ジョウトへ行くわよ」
そういうと少女は慣れた手つきでレックウザの体を掴んでそのままジャンプをしてレックウザに飛び乗った。
「……分かった、リーフ」
レックウザは少女――リーフを乗せてふわりと浮遊した。風が再び吹いて木々がざわめく。
リーフを乗せたレックウザはそのまま上空へと飛び、暗闇の空へと消えていった。

はっぱ（後書き）

また修正するかもしてません。

ビリビリバトル1

ブラックは柔らかい布団の中に居た。
純白の真っ白な布団はブラックを優しく包み込み、何もかもそうでも良いと思えるほどの安らぎを与える。
「……あー、もうどーでもいい……あー」
寝返りをうつと布団が顔を包み込んだ。
本当にどうでも良い。なにがどうなろうとどうでも良い。
例えるなら朝二度寝をした時の気分だ。
二度寝をした時の快感。誰もいない自分だけの世界で快感に溺れる。
これほど幸せな事はあるだろうか？
「あー、でもなんか腹減ったな……母さん、朝ごはんまだかな……」
「ここはお前の家じゃない。何を言ってるのだブラック」
「何言ってんだよ……母さん……ん？」
ブラックは違和感に気づく。それを境に全ての幻想は崩れた。
目の前に写るのは純白の布団ではなく純白の羽毛。確かにフワフワしているがところどころゴツゴツとしている。おそらくこれは皮膚より下にある骨の部分だろう。
「寝ぼけているのか？　まあそれはいい、お前の住居を知りたいのだが……」
ごうごうと風が頬をすり抜けた。

二章　電撃少女

どうやらブラックは今レシラムの上に居るらしい。体を上げて目の前を確認するとレシラムのクビにあたる部分が見えた。
しかし、そんな事は今のブラックにとってどうでもよかった。
頬――いや、全身をすり抜ける風。
周りを見渡すと見えるのは羽ばたいているレシラムの翼。そして、その向こうには何もない。青い空間が広がるだけだ。
ブラックは一度深呼吸をして自体を確認した。
たった今起きたブラックには何が起きたのかはよくわからない。ここに居る前は夢の跡地に居たはずだ。
それに、そこに居た時は夜だったはずだ。
それがどうした事か今は強い風が吹いている場所に居た。それに、いつの間にか朝になっている。
ブラックはまだ眠っている脳をフル回転させ思考を巡らせた。
とりあえずレシラムは羽ばたいている。そして見える青い空間。ここは地上じゃない、空だ。
「おい、レシラム……どういう事だ」
「ん？何がだ」
「何で俺らは今空に居るんだよ。あの糞ムンナ達はどうした？　昨日のはなんだったんだよ！」
とにかく意味が分からない事がたくさんあった。
何故自分は今空に居るのか。ムンナ達はどうなったのか。ブラックが気絶する前、最後に見たあの紅の世界はなんだったのか。
「相変わらず質問ばかりだな。いいだろう、全て答えてやる。今空を飛んでいるのは夢の跡地から離れる為だ。あの場所にずっと居ても迷惑だからな。ムンナ達にはあの後例を言って別れた。昨日……のとはなんだ？　詳細を言わなければいくら私といえども分からない」

「お前と契約した時に周りが熱くなって……なんか、いつの間にか真っ赤な所に居たんだよ。なんだったんだアレ」
「真っ赤……？」
レシラムは羽を羽ばたかせて呟いた。
「ブラック、お前はもしかしたら覚えていないかもしれないが……お前は私と契約した瞬間、倒れてそっれっきりずっと眠っていた。きっと夢だろう」
「夢……」
しかし、ブラックは納得がいかなかった。確かにブラックは目を見開いて紅の世界を見たのだ。
熱気はブラックの体を包み込み体の中まで浸透した。
紅と熱だけの世界。
確かにハッキリとした事まで覚えていないが、ブラックはその世界を目に焼き付けた。
「……」
「どういうした。まだ納得がいかないのか」
「当たり前だ」
「確かに少々気になるな……まあその話はお前の住居についてからでもできるだろう。……で、ブラック、お前の住居を知りたいのだが何時になったら教えてくれるのだ」
「な……お前と家に行くのかよ……」
「……どうした、もう怖気付いたのか」
ブラックは怖気付いたわけではなかった。
脳裏に浮かぶのはレシラムを見て口をポカンと開ける、そして喧嘩した母親が写っていた。
「違う……アレだ、母さんがお前見たらびっくりするだろ……お前は伝説のポケモンだからな」
「確かにな……だがこのまま飛び続けてもしょうがない。それなら私はお前の住居の近くで隠れよう」
「い、いや……それは……」

「ん？　どうした？」
本当の事を言ってしまおうか。しかし、その選択肢を選んでしまうとレシラムに馬鹿にされてしまうのが落ちだろう。
とにかく家には行きたくない。
それがブラックの気持ちであったが、それに反して体は全く逆の意思を示していた。
グゥウとブラックの腹から音が鳴った。
「……」
「……ブラック、腹が減ってるのか」
「減ってない」
「正直に言え」
「……昨日の夜から何も食ってない」
「……そうか」
風が轟音を立てる中、どうして小さな腹の音をレシラムが聞けたのかは分からない。
しかし、今はそれより自分の空腹を満たす事が最優先だと体が言っている。
「……カノコタウンだ」
「そうか……」
その言葉と共にレシラムは翼をゆっくりと動かして下降した。
「全く、早く教えてほしいものだな。カノコタウンは正反対の方向にある」
「……」
ブラックは言い返す気力もなかった。
頭の中を回るのは自分の母親にどういう対応をすればいいのかという後悔の気持ち。
体の向きを変えてさきほどとは逆の方向に飛ぶレシラムの背に乗りながら一人途方に暮れていた。

ビリビリバトル１（後書き）

少し修正しました。

ビリビリバトル2

ブラックは玄関の前で立ち往生していた。
レシラムとは先ほど一番道路の囲いの奥にある林に隠れてもらい別れたばっかりだった。
一晩ぶりに見た家の扉は焦げ茶で所々砂が付いているが綺麗だった。
「どうしよう……」
この扉を開ければきっとカンカンに怒った母親が出てくるだろう。
そして、「一晩何をしてきた?」や、「どこで過ごしていた?」などと聞かれるのだ。
今まで何をしてきたなどと言える訳がない。「夢の跡地に行ってレシラムと出会ってこれから創造神様が企画した殺し合いに参加する為に契約して空を飛んでいた」なんて言える訳がない。
飽きられるか、病院に連行されるだろう。
ブラックはドアの取ってを握り締めた。
重い金属で出来た取ってはいつもより冷たく感じる。
「くそ……」
何を言えば良いのか分からない。
しかし、この腹の空腹を満たすにはこの取ってを捻りドアを開けるしかないのだ。
ブラックは手に力を入れた。
重い金属の取っては少しの抵抗と共に小さく唸り軽く押すと扉が開いた。
「ただいま……」
ブラックは小さく呟いた。
なんだか自分が情けない。
母親への言い訳はブラックの中で浮かんでは消えて浮かんでは消えての繰り返しだった。
「……ただいま」

ブラックは先ほどより少し音量を上げて言った。
家はシーンとしていた。
誰も居ない家というのは少し不気味なものだ。
春だというのに少しヒンヤリしている。
「母さん……？　居ないのか……？」
ブラックの母親は元ポケモントレーナーだ。
ブラックの父親とはその旅先で出会い、二人は結婚した。ミネズミの手当が出来たのもその経験のおかげだ。結婚と同時にブラックの母親は旅を辞めてブラックを産みそのまま家事に専念している。
つまり、今ブラックの母親は仕事をしていないのだ。
仕事のせいで今家を開けている……という事はないだろう。
「どこ行ったんだ……？」
夕食の買出しにしては早すぎる。
ブラックは昨日の事を思い出した。
レシラムと共にこの殺し合いに参加する以上、ブラックの命も狙われているのだ。
もし、ブラックはこの家に来るまでに他の参加者にブラックがレシラムと契約したという事がバレていたら。敵が人質として母親を拉致していたとすれば。
ブラックの背中を冷たい汗が流れた。
「か、かあさ……！」
ブラックは乱暴にドアを閉めた。
ドアが閉まる音と同時にメキリと木材が歪む音が聞こえた気がしたが、今のブラックにはどうでも良かった。
「母さん……！」
ぐるりと方向転換をしてブラックが走ろうとした――その時だった。
「ちょ……お前帰ったのかよ、落ち着けって！」
誰かの声と共に、何かがブラックの頭の上に覆いかぶさった。
「うぐぉっ……」

頭の上に覆いかぶさった何かの重みでブラックは小さく呻いてよろけた。
「な、なんだこれ……っ」
ブラックはその何かを確認しようと両腕を自分の頭上に上げた。
「い、いてっ、まだ痛いんだからやめろって！」
叫びを無視して、ブラックはその何かを掴んだ。
「痛ッ……離せよ！」
「は……？」
茶色く、少し硬い体毛はブラックの掴んだ手にチクチクと刺さった。
頭には白い包帯を巻き、特徴的な赤い眼光をしている。
どこをどう見ても――ミネズミだった。
しかし、ブラックが驚いている理由はそんな事ではなかった。
「喋った……？」
「は……？」
「喋った……？」
「は……？」
「喋った……？」
「おい、何時までこの会話を続ければ良いんだ？」
呆れたようにミネズミはそう「喋った」。
ブラックは昨晩レシラムと会話していた事を思い出した。
しかし、昨晩のレシラムとの会話はテレパシーで成り立っている。
実際にレシラムは人間の言葉を発して喋っていたわけではない。
だがどうだろうか。このミネズミは口を開き、人間の言葉を発している。
喋っているのだ。
「お前……人間の言葉言えたのか？」
「何言ってんだこいつ……言えるねーだろ……」
「いや、今言ってるだろ……」
「言ってないって言って……」

一人と一匹の間に沈黙が流れた。
ブラックは今の会話で確信をした。確実にこのミネズミは人間の言葉を話し、今ブラックと会話をしている。
「なんだと……？　この人間、オイラの言葉が分かるのか……！」
「ど、どうなってんだ……」
「おい、人間。どうしてお前はオイラの言葉が分かるんだよ」
「こっちが聞きたい。何でお前と会話出来るんだよ……」
「んな事知るか！」
ミネズミはそう言うと手足をじたばたと動かした。
「とりあえずその手を離せ人間！　痛いだろ！」
ミネズミはそう言うとブラックの指に噛み付いた。
指に食い込んだ歯がブラックの皮膚を破ると同時に激痛が走った。
「いてっ……！」
ブラックはミネズミを投げつけるように手を離した。
勢いよく重力に引き寄せられたミネズミは体操選手のごとく綺麗に地面に着地してブラックを見た。
「もっと優しく降ろせよ！」
呆れたように言うミネズミが見たブラックの顔は――まるで何かに絶望したように歪んでいた。
ミネズミが噛んだ指からは少量の血が溢れていた。

ビリビリバトル２（後書き）

若干編集しました。

ビリビリバトル3

しかし、いくら血が出ているとはいえそこまで深い傷ではないはずだ。
ミネズミ自身も少しは手加減していたつもりだった。
しかしの顔は歪み体は小刻みに震えて指を凝視していた。
「どうしたんだよ、ちびったんじゃねーよな？」
ブラックはミネズミの言葉を無視して――いや、まるで聞こえていないように指を見ていた。
溢れた血は指を伝って地面を赤に染めた。
「お、おい……どうしたんだよ……」
さすがのミネズミも少し心配になってきた。
どう見てもブラックの様子がおかしいのだ。
「……た……」
ブラックが何かを呟いた。
「お、おい……」
「痛い……痛い痛い……うぅ……だからポケモンは嫌なんだよ……っ」
「……」
一体どういう事だろうか。
ミネズミは黙ってブラックを見る事しかできなかった。
手加減をしたつもりが深く噛みすぎたのかもしてない。それにしてもさっきの様子は少しおかしいが、たぶん原因は深く噛みすぎたせいだろう。そうであって欲しい。
「お、おい。まさか泣いたりするんじゃねーだろうな？」
「……うるさい……」
落ち着いたのかブラックはそう呟くとヘタリとその場で座り込んだ。
いきなり何をするかと思えば大きく深呼吸をするブラックを見てミ

ネズミの大きな目は変な物を見るようにブラックを見た。
「何してんだお前……」
ミネズミがそう言うとブラックは深呼吸をやめた。
「……成長したな、俺……」
「は？」
いきなり何を言い出すんだこの人間は。
ミネズミはぶつぶつ何かを呟くブラックを見てそう思った。
噛まれたと思えば急に固まったり、固まったと思ったら座り込んだり、座り込んだと思ったら深呼吸したり、深呼吸したと思ったら意味の分からない言葉を言ったり、人間とはこういう生き物なのだろうか。
いや、違う。少なくともこの馬鹿の母親は正常な人間だったはずだ。
ミネズミは目の前の人間を見てため息をついた。
「何言ってんだお前……」
「ん？いや、独り言だ」
真面目な顔でブラックはそう言った。
本当にこいつは訳が分からない。
「今までこんな奴の為にママさんと他の人間が困ってたなんて……あ！」
ミネズミはすっかり忘れていた。
自分はその為に戻ってきたんじゃないか。
「おい！　早く立て！」
「ん？　どうした急に？」
「どうしたじゃねぇ！　お前のママさん、お前を探して……」
ブラックは頬に思いっきりビンタを喰らったかのようにハッと目を見開いた。
そうだ、こんな事でじっとしてはいられない。
今は急ぐべきなのだ。母親を探さなくてはならない。
「ミネズミ、早く母さんは……！？」
ミネズミが言う言葉には耳もくれず、ブラックは叫んだ。

「昨日事件があったってのはあそこよね、ゼクロム」
「ああ、ポケモン達が騒いでるし、ここで違いねぇ」
ホワイトとゼクロムは夢の跡地上空にある雲の集団の中に身を潜めていた。
真下にあるのは夢の跡地。
昨夜、野生のムンナが大量発生したらしく一晩立った現在でも警察が周囲に散らばり見回りをしている。
見たところによるとムンナ達の大半は未だに集団で固まっており道を塞いでいる。
一匹ならまだしもこんなに大量に居てはさすがの警察もお手上げと言った所だろうか。
下手な攻撃をすると全員が反撃してくるかもしてない。
昨夜、ムンナ達を運ぼうと試みたもののサイケウェーブを放ったり、あくびで戦闘用のポケモンが眠ったりとしてなかなか移動出来なかったらしい。
普段は大人しいと言われている夢の跡地のムンナだ。よほど興奮をしていたのだろう。
こうなってしまった事の原因として考えられる理由の一つとしては、レシラムだ。
昨日、ホワイトはレシラムとサンヨウシティ上空で戦闘をしていた。
レシラムを弱らせたもののその後レシラムは羽ばたきをやめてそのまま落下、結果としてはレシラムを見失ってしまた。
夢の跡地はサンヨウシティのすぐ近くにある。
もし、レシラムがサンヨウシティに落ちたのならば伝説のポケモンが現れたと今以上の騒ぎになるだろう。
しかし、レシラムが現れたとの噂は聞かない。
もし、仮にレシラムが夢の跡地の落ちたとすれば？　レシラムが落ちた事によりムンナ達が興奮し一斉に夢の跡地から逃げようとして

いたのならば？
こう考えれば話は全ての辻褄が合うのだ。
ホワイトはニヤリと笑った。
「フフフ……これでレシラムをゲット出来るわ……」
「おい待て、こんなに警察がたくさん居る状態でどうやって夢の跡地に行くんだよ」
「うるさいわね、そんなのアンタの力で警察を蹴散らせば……」
「おい、伝説のポケモンに何をさせる気だ」
目を輝かせてそう言うホワイトを見下ろしながらゼクロムははぁとため息をついた。
どうやら今のホワイトの頭の中にはレシラムしかないらしい。
ゼクロムとホワイトが出会って四日が立った。
ゼクロムと初めて出会った時のホワイトも今のように目を輝かせて、キャーキャー叫びながら周りをぐるぐると回っていた。
契約もすぐに行い、なんとかやっていけると思ったものの現実は甘くなかった。

ビリビリバトル４

出会って二日ほどで邪魔者扱いされ、まるで思春期の女の子が自分の父親を見るような目で時々見てくるのだ。
実際はそこまで嫌われてはない……と、（おそらく）思われるが最初に出会った時と、今自分を見つめる時の眼が違いすぎる。
所詮人間の娘、と考えるも少々寂しい気もする。
やはりパートナーとは仲良くやって行きたい。
「……はぁ」
「どうしたのよゼクロム、最近ため息が多いわよ」
どうしたもこうしたもない、原因は今目の前に居るホワイトなのだ。
「なんでもねぇよ……」
「ふーん、じゃあさっさと警察共を……」
「それだけは駄目だ馬鹿！　とにかくなんとかしてこの警察達に見つからねぇように夢の跡地に行くんだよ！」
「それが出来たらこんなに困らないわよ阿保！」
ホワイトはそう言うとポコポコとゼクロムの肩を叩いた。
「……おい、痛いだろやめろ」
本人は思いっきり殴っているつもりなのだろうがほとんど痛みを感じない。
しかし、とりあえず「痛い」と言っておけば何時かやめてくれる事を信じて今までも、そして今もそう言ってきた。
しかし、今回はそれが裏目に出てしまった。
「……何よ、その棒読み。馬鹿にしてるでしょ！？」
「あ？　してねーっつの」
「嘘つき！　馬鹿ゼクロム！　もう一人で行く！」
そういうとホワイトは思いっきりゼクロムの背中を踏みつけた。
「イッ……！」

今のは痛かった。
さすがのゼクロムも少し顔を歪ませて唸った。
「なにす……！？」
ゼクロムがそう言った時には背中の微かな重みは消えていた。
ホワイトはゼクロムの背中に乗って雲の下の夢の跡地を見ていた。
そのホワイトが今、ゼクロムの数メートル下で浮かんでいた。否、落下していた。
右手で被っている帽子をしっかりと頭に押さえつけて顔は下を向いていた。
「何してんだ馬鹿野郎！」
ゼクロムの咆哮と共に雲は拡散して消えてバチバチと蒼い閃光が走った。
雲がなくなり晴れた視界の向こうには夢の跡地、そしてそのもっと前にはホワイトの姿が見えた。
「キャァァァァァァアアアアア！」
ホワイトは悲鳴を上げて、だがしっかりと帽子を押さえつけて落下をしていた。
「怖いなら自分から落ちるんじゃねぇぇえええええええええ！」
ゼクロムはそう吠えてホワイトに追いつかんとする早さで落下するホワイトの元まで飛んだ。
黒い翼で速度を調整して、確実にホワイトを掴めるように追いつく。
「キャァァァアアアアアアアアアア！　死ぬぅぅぅぅぅぅぅぅ！」
ホワイトの高い声が耳に届いた。長いポニーテールは風で舞い上がりバタバタと揺れていた。
ゼクロムはホワイトのすぐ真上まで近づき、ゆっくりと両腕でホワイトを抱けるように伸ばした。
「ホワイト！　暴れるな！　この際このまま夢の跡地まで行くぞ！」
ゼクロムはそう言うとホワイトをゆっくりと抱き上げた。ふわりとホワイトの髪の毛が舞う。

「あ……う……」
ホワイトはぐったりしたまま目を開き青い顔をしていた。右腕はまだしっかりと帽子を抑えている。
ゼクロムはそれを見て安堵のため息をした。
「よし、そのまま暴れなよ……」
ゼクロムはそのままスピードを緩めた。風による抵抗が徐々に減っていく。
地上の建物と木々がどんどん大きく見えている。地上に居る小さな警察もハッキリと見えた。
上空から見えていたピンク色の物体も一つ一つがムンナだという事が分かる。
「警察が来ると面倒だからな、建物の近くに降りてすぐに中に入るぞ」
「……」
ホワイトを見ると落ち着いたのか帽子を深く被ってじっとしていた。
帽子の鍔(つば)で顔はよく分からないが多分大丈夫だろう。
ゼクロムはホワイトを見ると、地上を見つめた。
体を着陸体制に移し、ホワイトを落とさないようにする。
地面の草は風で扇がれ、木々はざわざわと音を立てる。
足が地に咲く花と密着し、ゼクロムは大地に降りた。
ゼクロムは一拍あけてふぅとため息をついた。
「……おい、大丈夫か」
「……」
「おい……」
ホワイトからの返事はない。
ショック死でもしたのかと一瞬嫌な考えがゼクロムの脳裏を過ぎったがすぐさまその考えは否定された。
無表情だったホワイトの唇が動いた。
「……警察に見つかるじゃない」

「しょうがねーだろ、お前のせいだ」
「うっさいわね、ゼクロムのくせに……うぅ」
「おい、ここで泣くな。俺は子守なんてしたことねーからな」
「……うっさいわね！」
ホワイトはそう叫ぶとガバリと起き上がりふくれっ面を見せた。
「私がアンタのご主人様なんだからアンタは私を守って当然なの！」
「あー、そうだな」
ゼクロムは助けなきゃよかったと心で悪態をついた。
「降ろしなさい筋肉野郎！」と叫んで暴れるホワイトをゆっくりと下ろして周りを見る。
何処からか人の声が聞こえた。きっと警察官だろう。
だが、そうすぐにここまで来られないはずだ。
ムンナ達のせいで警察官が集まり近づきにくかったが今はムンナ達のおかげでゆっくりと夢の跡地を見る事が出来るのだ。

ビリビリバトル5

「人の声？　アンタのせいで見つかったじゃない」
「うるせぇ、なんでもかんでも俺のせいにするな。安心しろ、ムンナ達が居るからここには来れねぇはずだ」
「ふーん……」
ホワイトはそう言うと帽子を取り、パンパンと叩(はた)いた。
「アンタの電気で帽子が汚れちゃったじゃない」
「うるさい。電気で帽子が汚れる話なんて聞いた事ねーぞ」
ホワイトはゼクロムの言葉を無視して帽子をかぶり直した。
「ゼクロム」
「あ？なんだよ早くあの建物の中に入るぞ」
そう言ってゼクロムは顎で夢の跡地の建物を指した。
「あ……あ……」
「あ？」
「……な、なんでもない」
ホワイトはそう言ってすたすたと建物に向かって歩きだした。
「おい、なんだよ」
「うるさい！　早く中に入るわよ！」

ビリビリバトル５（後書き）

書きかけです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9833u/

竜と俺との契約記

2011年12月4日01時55分発行